

島の明るい未来のために

三宅村村長 櫻田昭正



新年明けましておめでとうございます。

三宅島ふるさと再生ネットワークの皆様におかれましては、全島避難以降ふるさとへの想いを抱きつつ各地で生活されている三宅の同胞を、様々な形で繋ぎ、励まし支援して下さっている長年のご尽力に対し、改めて感謝申し上げる次第です。

さて島では昨年、新生

2018年の年頭にあたり、櫻田昭正村長からご挨拶をいただいた。櫻田村長は、三宅島の次世代を担う子どもたちの育成、および長期研修制度で島外から若者を受け入れている漁業、遊休農地の再生などに取り組んでいる農業等の更なる活性化を目指していくという方針を話された。

三宅小中学校が開校10周年の節目を迎えました。現在の児童生徒の全員が噴火後の生まれとなり、島内各地区からこの1村1校の学校に集い仲良く学んでいます。この次世代を担う子どもたちに対する我々三宅の大人の今後の使命は、彼らにこの島の各地の歴史と文化を確実に継承し、それを土台にしつつ新しい三宅の歴史を創造していくことのできるたくましい心と体を育てることだと思っております。

島内産業も復活に向けた取組が続いています。漁業では、長期研修を受けている島外出身の若者のうち2名が、自分の船を持ち独立を果たしました。農業でも遊休農地の再生、新規就農者の支援や育成に努めています。友好関係にある群馬県みなかみ町とは、果樹の栽培事業に共同で取り組んでいく予定です。近い将来、三宅の旬の海の幸、山の幸をさらに多くの方々の食卓にお届けできるよう、今後も工夫と努力を続けてまいります。

結びに、三宅島ふるさと再生ネットワークの事務局及び会員の皆様と三宅島にとって本年も素晴らしい年となりますよう祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。



あけましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。誠にありがとうございます。本年もまた倍旧のご助力を賜りますようお願い申し上げます。

「ふるさとネット」も今年で早や13年です。2000年の噴火・火山ガス被災のために長期的な全島避難は、忘れたくても忘れられません。また忘れてはならないのです。

最近出版の『震美術論』（榎木野衣著、美術出版）は、「単なる『過去にあつた出来事』としてではなく、『必ずまた起こること』として伝える『事前の記憶』として被災に努めるべきだと指摘しています。『読書新聞』29年12月3日書評より）

「帰りたいでも帰れない」千人の被災島民・在京者の皆さまに郵送している『三宅島新報』読者の高齢者の方々の家族からのお便りと住所不明の返送が増え、案じながら年月を送る日々です。

櫻田村長をはじめ皆さんが、在京者を気遣っております。在京者・在島者共々お互いに支え合い頑張りましょう。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク

〒173-0005
東京都板橋区仲宿2-1
TEL 090-4922-0798
FAX 03-3964-4065

発行人：会長 佐藤就之

事務局便り

謹賀新年

本年もよろしくお願ひします



会長 佐藤就之 副会長 酒井一豊 光安千久子（三宅島支部長）
事務局長・会計 板倉美紀子 世話人一同



お互いに支え合いの気持ちで

ふるさとネット会長 佐藤就之

社）は、「単なる『過去にあつた出来事』としてではなく、『必ずまた起こること』として伝える『事前の記憶』として被災に努めるべきだと指摘しています。『読書新聞』29年12月3日書評より）

「帰りたいでも帰れない」千人の被災島民・在京者の皆さまに郵送している『三宅島新報』読者の高齢者の方々の家族からのお便りと住所不明の返送が増え、案じながら年月を送る日々です。

櫻田村長をはじめ皆さんが、在京者を気遣っております。在京者・在島者共々お互いに支え合い頑張りましょう。

浪江町からの移住者 国分晶子さん

避難先の出会いが縁で

東日本大震災による原発事故の影響で故郷の福島県浪江町から神奈川県に避難をした国分晶子さん、避難先での出会いが縁で昨年8月に三宅に移住し、現在は島の介護施設で働きながら順調に新生活を送っている。「島の風景は故郷に似ている」と話す国分さんに三宅に移住をしようと思った理由や生活の様子などに関する寄稿をいただいた。



国分さん(右の写真)の呼びかけで光安支部長も参加した世代交流会

三宅島に移り住んで半年になりました。三宅島との最初の出合いは、7年前、東日本大震災による原発事故の影響で、福島県浪江町から神奈川県に避難した時です。新しい職場にて、偶然お会いした方が、三宅島から三浦郡葉山町に避難され

て様々な活動をされています。長期休みには、福島の子どもたちを受け入れて海や山での体験活動などにも力を注がれておられました。「避難」という同じ体験からでしょうか。すぐに意気投合をし、友人としてのお付き合いをいただくようになりました。又、折に触れて、三宅島の素晴らしさも、熱く語って下さいました。

昨年1月に怪我をして、仕事を休んでいたとき、三宅島を訪れました。民宿の近くにあるアカコッコ館や、大路池の周りを散策しながら、こういう所に住ん

プロフィール

1951年(昭和26年)8月福島県浪江町生まれ。東日本大震災の秋、横浜市に避難。一昨年東北に戻るが、再び上京、昨年の8月に三宅島に移住し、現在に至る。

何も考えずに即答

でみたいなあと感じたことを葉山の友人に話しました。

故郷の浪江町は、一部の地域を除いて未だに「帰還困難区域」のままです。自宅も、その中に在ります。

怪我也良くなり、仕事に復帰して間もなく、その友人から「三宅島に行く気持ちはまだありますか?」と訊かれました。私は、何も考えずに「有ります」と即答してしまいました。田舎で生まれ育った私にとって、都会での生活は難しいものがありました。

それからひと月後に、三宅島の住民として暮らし始めました。介護施設で、介護員として、島の高齢者の皆さんのサポートをさせていただいております。現在、介護福祉士を目指して勉強中です。デイルームや、送迎車の中での利用者の皆さんとの会話が、何よりの楽しみです。20年毎に繰り返しているという雄山

学生と島民の懸け橋に

私が葉山町で働いていた時から一緒にボランティア活動をして来た、関東学院大学の先生と学生のみなさんが、三宅島でも活動したいといって「三宅島多世代交流プロジェクト」として、昨年の10月・12月に三宅にやって来てくれました。学生と島の子ども達や様々な年代の方々が一堂に会して、野菜の種を蒔

の噴火の話や、様々な歴史や、生活を垣間見ることが出来ます。厳しい自然環境にも拘らず、明るく元気に暮らしていらっしゃる高齢者の皆さんから、何があっても力強く生き抜く術と力をたくさんいただいております。そして何より嬉しかったのは、アップダウンと曲がりくねった道が、故郷の浪江にとっても似ていることでした。三宅島では、山合いか見えるのは広い海原ですが、故郷では、分水嶺の近くなので小さな川が見え隠れしていました。

いたり、手入れをし、また、かぼちゃのランタン作り、クリスマスのリース作りなど、季節に合ったプログラムを組んで実施しました。

私は島に来てまだ日も浅いにもかかわらず、職場の方や、船の中で知り合った方、サークル活動に声をかけて下さった方々が、家族ぐるみで参加して下さいました。企画された学生の皆さんも、島で過ごした時間は僅かでしたが、島の皆さんとのふれあいを通して、多くの事を感じ、学んだようです。

このプロジェクトは、3月にも行われます。又、次年度も活動が続けたいと挑戦中です。学生の皆さんは、被災地支援として、宮城、福島にも足を運んでいます。様々な活動を通して、社会福祉の道を目指しています。

三宅島での交流体験も大きく関わってくる事でしょう。その懸け橋になる事が、私の役割の一つではないかと思っております。

「敬老の集い」賑やかに開催

各地区の老人会が工夫を凝らした出しものを



今年度の「敬老の集い」は、昨年10月15日午前10時より三宅中学校体育館で開催された。例年の事であるが、会場は各地区老人会が趣向を凝らし競演となっている。

主催者を代表して櫻田

村長が挨拶、石井議会副

議長、渡邊三宅支庁長、

田中三宅警察署長等が祝

辞を述べ、寺本社協会長

が乾杯の音頭をとった。

来賓を含め232人が参

加し、各地区の演芸披露

となった。

今年度は、特に伊ヶ谷

地区と伊豆地区が工夫を

凝らした出しものを披

露、男性の参加も目立つ

毎年恒例の「敬老の集い」が今年も盛大に行われた。会場となった三宅中学校体育館では、櫻田村長などの挨拶に続き、各地区の老人会が趣向を凝らした出しものを披露し、島で暮らす高齢者の元気をアピール。島民間の交流の輪を広げる好機にもなった。



た。またあじさいの里や地元駐在家族なども含め参加があり、会場は華やかさを増していた。

「敬老の集い」は、最後に書間三宅村シルバール人材センター会長の万歳三唱で閉会した。



頼もしい！若い世代の力



小・中全校生の合唱「この星に生まれて」

三宅小・中学校 開校10周年の節目

三宅村立小学校・中学校の開校10周年記念式典が11月3日午前9時より三宅中学校体育館に於いて盛大に行われた。式典では全校生徒が「この星に生まれて」を力強く合唱するなどして式典を盛り上げた。また、「10周年記念誌」には全島避難当時のことが克明に記録され、当時を振り返る資料となっている。

式典は、小・中学生全員と88人に及ぶPTA役員、各種団体、機関など多数の方々が来賓として招かれ、島上げてのお祝いとなった。

式典は、挨拶、来賓紹介、スライドによる10年のあゆみ、全校合唱「この星に生まれて」(写真)、小・中の校歌斉唱で閉会

となった。

午後から文化祭。様々な発表がなされたが、注目していた中学1年生の「地域理解学習」は、堂々としてしっかりと発表していた。さらに映像も美しく紹介。ぜひ東海汽船空港の待合所、郷土資料館など各所で活用するよう

DTPA会長 芝朋美

「繋げる」お手伝い今年も



あけましておめでとうございます。この三宅島新報の発行も今年で13年目になりました。

DTPAの私たちから下の代は、実は三宅島に行ったことがあります。そのため加入当初は

うに提言したい。

「創立10周年記念誌」は、表紙を開くと「灰色の三宅港に集まった児童生徒とストレチア丸(2000.8.29)」の写真、「小中・高校の児童・生徒百三十六人と職員九十四人が島外へ避難。秋川高校へ」と沿革史に。写真には、「公衆電話を利用して行う離れた家族との会話」、三台公衆電話が。この公衆電話にまつわるお話を、最後にご紹介したい。「三宅島

新報」第39号(12年5月1日)発行で文化放送防災キャスターの高橋民夫さんが寄稿で「ラジオをお聞きの皆さんにテレホンカードをお寄せいただけないかと呼びかけたところ、放送終了後から問い合わせが殺到(中略)その数は膨大なものとなりました」。

これは平成13年の日本民間放送連盟・ラジオ放送連盟活動部門入選となる。「改めて日本人の絆に感謝」と結んでいる。

ご寄付者名

光安千久子様、佐藤宗ノ子様、佐藤就之様、吉野文雄様、吉田信行様、板倉美紀子様

(H29.9.3、H29.11.6) 寄付有難う御座いました。引き続きお願いいたします。

【寄付受付先】

郵便振替口座

口座番号：00120-3-545036

口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

生のときに参加した神楽坂商店街のあおぞら市では、実際に島の方々と一緒に、三宅島物産展にてたけのこや明日葉といった島の名産品を販売しました。そこで初めて島の方々と直接お話が出来たことや、紙面の上だけではなく直接三宅島の今を伝えるお手伝いができたことが、非常に私の中で印象深く、心に残っています。

メンバーは勉強やサークル、就職活動など様々な事情を抱えており、毎

回充分な人数で活動することが難しいのが現状です。ですがそのなかで三宅島新報を今でも発行し続けているのは、三宅島ふるさと再生ネットワークの方々や、DTPAという団体を創設した先輩たちの想いが今でも引き継がれているからだと思います。今後その想いを下の代へと引き継いでいながら、三宅島新報という媒体を使って島の方々と繋げるお手伝いをしていきたいと考えています。